

卷之三

流城東

中山主尚寧薩摩小來る薩摩の使を後廢小立り琉球王を逐て琉球せんと云ふ旨御密書あり
琉球公主家ノ小福ニヤ章を授らる八月甫慶宣阿葉院ノ貢物を後廢小朝モ書を被玉並
小福ニテ毎年犯あ平戸小高船交易年^{正月}有余せらる阿葉院人の入貢是より始る十三
月琉球衆久使並後府江戸小朝^{正月}琉球は小福^{正月}と御毛を後廢三列を教宣^{正月}小福リ
水戸^{正月}教房^{正月}小福^{正月}十六年二月沈田彌政福清^{正月}剛加賀清^{正月}高義政^{正月}木の洋村小朝
ニテ尾別清源の城を名古屋^{正月}小移^{正月}新小城^{正月}築^{正月}美志^{正月}小福^{正月}同二月勅使後廢來
て前年讓位の事^{正月}若く八月琉球衆久琉球の中山王を勢^{正月}後廢小立り琉球サ^{正月}琉球來
て彼の招^{正月}同年九月琉球^{正月}派要一級深食の信船^{正月}命^{正月}總持院^{正月}於て優^{正月}せ^{正月}也^{正月}是
年傳焉吉田意安父宗^{正月}拘^{正月}送物杜氏の画^{正月}奇効良法^{正月}を勅^{正月}同年十月其^{正月}遣^{正月}之^{正月}
正月門^{正月}大^{正月}國^{正月}後^{正月}還^{正月}十六年正月廿一日大政^{正月}高^{正月}義^{正月}葉相^{正月}の出^{正月}從^{正月}小福^{正月}ハ密旨^{正月}有^{正月}と
之^{正月}也^{正月}出^{正月}避^{正月}久^{正月}琉^{正月}密^{正月}シ^{正月}門^{正月}其^{正月}先祖^{正月}新^{正月}國^{正月}大^{正月}然^{正月}少^{正月}義^{正月}モ御^{正月}治^{正月}小^{正月}福^{正月}中^{正月}府^{正月}將軍^{正月}湯^{正月}
安^{正月}志^{正月}小^{正月}大^{正月}納^{正月}ミ^{正月}ト^{正月}權^{正月}ら^{正月}同年二月尾別名古屋城^{正月}を以^{正月}巡^{正月}足^{正月}有^{正月}史^{正月}より典^{正月}由^{正月}上^{正月}清^{正月}女^{正月}義^{正月}系^{正月}約

同月廿七日 海陽旅院
廿八日豐後右衛門入備二重亭へ登嘗 時對於門年四月廿八日
後府へ還済 八月出自由火炮を試み同年九月十日吉田神社院梵舞及奈良寺前並を同
索に如く大内家主後代へ乞方之法式を察作べと載らる是頃の文小松生「如之尔未達武式目沒ひ
參社或美子群書活要自親政委統自本紀の於某に傳究ひ是千年内法令類存せらるゝ為の法が多き」
廿日南雲世界易屏風 清楚あり是域此の由來次第及ぶ是英玉馬の日記小松生「是より是があ後
新伊西把沐西門十八年以漢入利亞ホの事モ此を有り物語主合利舍れ事も多うと思
某種の山難候あり「在田舎者少々有事活をまわはる」と云ふと入貢、其の五石出で金浦寒呂
宗門七年に太泥ム十年小遣に城田深門十七年小勤菴院門廿七年に亞馬港
門廿二日東摺法事と曰へくが美
物語主合利舍れ事も多うと思
是英玉馬の日記小松生「是より是があ後
廿十月船頭あ殿造
船脚來船擣秀質流家署東易屏風一枚と勒を二日天台西樂院送物とてニ太終六十卷岩井
画工船稿とおぼてやとを月十六日江戸入港 月十月上旬は世良因連や古市吉吉真舟和田金三の旗
小一乗法事達主是と大光院と号義童義貞あ朝臣の圓跡あり亦廣志の出島から之列思停
お無ち紙由送主是と是月後府へ還済 月十八日徳金莊炭院由身に傍て徳金二代將軍小條九

代の回教の戒律上此保曆間記兩點の一則を書此後又此の旨は後十九日夜未及て遙食
莊嚴院保曆間記持來 洪恭於不見其書也是年 仲殊 大獻公廟十八葉叔の法事
を揮毫せらる矣十七年二月 洪恭於東溫齋記是日之考一朝入女冠日也連書あり

同二月十日伊豆山般慈院続日本紀と歎を名まで是を讀むから十一日を去と道を海へ
中ト桂ト湯武放伐の事ありは對向桂山文集に我又退私涼稿小林氏のはあらがて天下至大者
見えずあり十三日御入京二云天子の名云ありと仰る一時畫一元紙小
一と云々畫一元唐宋後國今蜀漢吳魏西晋同四百五十四年十月魏軍來豫州入洛あり太師所據八角銀
三方為長後又于辛未之日六月廿八日道春八哥子子貢一昔の略城下向せらる亦湯武の海あり
七月十八日深室送物とて若氏日抄三十一卷を書せ毎日還在商客船以紙子難見紗縠波出
を載せ極て徳重雲美の也語空同一朝又八月二日科臣濟華を傍歌「小難三十日大明人一
官出業特出を乞上以赤大明人犯友出赤か出づ候てあん生て唐古の少難波あり同十月生
小波赤武別恩名小難一月八月十八日後周王出海城是年道義小余一赤艦總要を
擡立せりやう羅山文集又云赤舟漢小大祚恩常に其十八年二月後周田中に擡一あく
始後赤艦以爲常也

十四日 湘南小於て左義湯宿と備後六日梵釋出仕神名傳授秘密の事取く又八月宗那
生る中佐出する及まう本終祚往考余侍備後時幕下告曰は神志靈極志の時日既也後又有右軍比叡法師唐大後事志
御聟耳多々又取極不吉而御院後廢へまつて 湘南生之日を紀舒明室を極と傳承承
漢さりけ甚だ多美を貢てよめて宮内別院へそり 大おも被教の工を仰て之に傳きやと予に信られ
少神代の如どく假定と付て漢不人を紀承かみ鳥かく侍を後承へとすと傳ひき又羅山文集示所
丈山多小昔 東照大神考の治世也 徒余有育教方是技巫盡左多云ト考極之余對曰是太公可教
武王之法也 罪可之儀は一宿後府朝内修勞神祀と好登聴奪亡忠臣臣下亦
所可也耶ミムニ也某月の懲すきほどのたもののお教するを以て之小附也 内年六月十日久那死の
法度を定めらる手身一案に公私竟多く是を同量夜必拂ひて禁作材と載らる内七月七日日本之紀
縁古字あ(此の由來法也)内九月六日に別管山ち一切神の御被寄用御 略後西 芳草ふちの裏
慶院事の一切御の因縁物事經教入乎宮三支卷を御教三百八十二回御十六卷青美二十卷以上多子但向
七十一卷青教九卷未被寄少而九月六日に貝源御二卷を當日也と名づけ洋宗護玉篇成倍考不全一切純
之義教更往小才一卷經本曰在于江別小於麥山うち卷教凡乎卷數七百十卷缺本若干卷教凡十八年某内余有
司委度掌刀上面上部妙教九卷未被傳御本次納傳とち依賴教山林於宋地主記而充傳後且至澤山林
供寺免租稅云太經本今安坐滿焉老也才三卷經本曰在夏良修禪も長十卷某月遣役傳御以納傳上
ち才二卷經本曰在和別田城ち卷教凡乎年七月十五日應東於一条院内門を房泊以納傳上才二卷
唐本才三卷ハ 17年九月十七日後府出臺書内日廿七日源入御 書 十九年正月江右西苑重報
高麗本と云

内二月七日よりの傍徳不向の上空不達するの如は清九日出仕すべく文章と出給矣まゝ其
を作成する事へ為政以徳爲基也由後居モ处而元軍共之と爲ひ也内九日又の傍徳文章を持ぐ
清國又は在你外處占領不宣稱多若果流生訴於樂と云號を從らむ が事持不滿治子為政以徳
之と云ひて文小山が爲ひて爲ひて而其事は天下辨證ありづか辰のめ一方ニ年又の事も亦
撃退稱譽を成是爲西向うの文法也 由辰の勤公ノ事モ其事也其事と云徳と云也極多
ゆと云ひて有りとありと 内廿六日管法と定め廿七日冷白水申納云另滿系府モ古今傳授ありて為
あり げ夜乃ま 清節不倚モ 大臣而古今ニ國の大事と同せらるたま云ニ國の極みハ是モ之端貞
教名也是モ之洋小之箇の秘密の事ハ是モ之端也清名滿のり又知皆曰「なま」の性を廢すと云又其趣不
能子も之端角もも之を是モ古今集の二考より母子も人を云様と云て云れど様と云ふ者と云はれど
を代の考入云の事と云て云外に云うて云余猶河小竹久くからむの檢校法性院政遍となり今余の考
事り方を云々大おあこの後終業の振魂のと尋めと修せめへげ且つ余モうそ同ノ政遍我家に振魂
の法のみふてか持する事ハあつとも云ふ事の間と云ひシハナリハあり侍も魂と喚ふと云にようてかくやあると
言へるを即大和の 内年四月八日群云治要貞親政要綱目が紀延森式 清節不倚も出されスル傍徳文
武家の法度うちべき事と云様もあらざ景行と云義と清ち家承福も大光撰集三卷と云
即於 清節漢志あらう 国光大師も請の撰集總持院法華經大八宗の事大會記を勅
使市小於て冷白水令地院少漢志のらう 内七日今夜乃まを 清節不倚も漢志為政勅を讀せらるゝ

四月三十日辨文派要流目年紀延喜式本の提出 洋前より金地院にて書
廿日 大洋而作より公家中の法式記一定よりまんうかかねるの記録皆序あり此の名義
實源西ノ察正村の名義上に 光記小六月廿四日の出城小ニ集落内ニ代実源廣橋及び文體實源
後七月七日傳々不統て記録の文を辨にするか 並く之を於洋前而あ人並小作によると見西學率牙府等一統の
些少基づるを達て記録の文を辨にするか 祚君のとて事に法度及十七ヶ集落出するニモ源蓋一
とよる小島りと前手にて公家中の法式を總合せらるる言あり 徒の公家充多くハ如侍と般て極くそぞを
却ひすが深きを附小御紀を援引して某次失傳ありと云ふ 祇君是に太統せらるるとみて慨然として
遂小日暮の記録法がのち紀主を悲く竟死侍主せしめと雖小口其人自安者對す 一日其人自安者對す
世の慈謹とする子供達を國學より一々其熟達現索す 一日其人自安者對す 洋前より出
帝系總目江戸へ遣しより江戸は是を承て被り是日船橋式於備去其日の返去焉來日和物
本の記録仙洞寺九条處安勢に是あり 一因源東の門に月冷泉中納立為満足を井中納
玄祖庸後房へ余り古今集の秘奥深諺、之箇のたゞて以至朝天域の玄摩詮を參さ
せかひ古文を搜右庫以彼へませ多大悔て人争て是を轉も又以書六經の義に通するのを願
同小傳へうつ歎仰小精一毛ハ玄麿詮を出試曲竜小枝の教示取付て刻ひ残さるゝ也
内五月二日船橋より延喜式を出する内七月船橋より記録の書会 洋前より坐す源の所悲く

徳士が仕合被官を自承の体勢を保てば准心ホにアキルのト内十六日冷ひ水が満室
自家の三十六人三十六人一冊持茶 由後ト侍ふ 謂はる事無く
司ひの会う一人十首の内二首を切箱紙子の表と紙小付でこれを押入と云 ト十八人自東邊大松林處之民
送去の内を多喜の承認し其候故用少て廣納盡者承認是處を云 ト十八人自東邊大松林處之民
輕朝の例儀 トあく人光弘十九年七月廿日市内の太助が今次大作被官在布施拘出不修入用
城内へと移設出候外云 トあくと大作被官の時輕朝が在加の泥源東邊小記ゆれ處 トあくと大作馬
千本米主方不仕合すとあらわす子供は今度の爲人の紫泰院名を下と遂一小日記して置候る所
候るこの物也公安小云 ト一日冷泉が為満為家々自家根名坐左牧右牧の名稱の者抱持茶 美
少傳手サ日飛毛井中納云形す松の写を取せらるトサ一日飛毛井の數寄處次の間アソ源氏抱持茶
譲粉あり日廿七日飛懶學復すにアソ 大津市より幕下へ密書二十枚是を進せらる江戸
四文庫証とまこと此が爲めに飛毛井の事を云 ト此揚出三十枚の内北二枚廿八日承厚及より板金傳使より
と云 光延五年夏及より諫令の爲め上内達主事太助金半舟と門廿九日同准心侍中群要抄
と云 ト四文庫中利植 上使ひ西様拂走ひ方このシテ名奉りトあり ト内廿九日同准心侍中群要抄
十巻を載て今次文庫本也先年豈良閑向度次是文卷日抄家拂走本ト内年八月

六日内侍長老太翁一端上摺を付す曰は書主室也。百部うち三百部閑板すべて章次羽字廿方字
是ある中作出生の(是羽門版法字)内七日より御家遣手本一代集目批准公文(不叶)一月九日
そ燕宗雅友人某の室御家古今集逍遙院称院第二代集未済。右承滿矣。公文
充不足每々詰滿て云古今集の頗不審也。三十日公事竟。金龜院小法法大師去心經
乃夙夜行持の事讀之。參觀之逍遙院称院第。院事修勵也。語二教。内源氏御宿事。寒
美宮御子朝勅撰。ホア毎から諸人目正釋。八月十二日山名禪閣。帝席小於く。あ吟の連歌を
是仍走十九日。佛令が來。次是ハ金源文庫より豐後國向是とおて。今出川郡不破走り。今はと
委せらる。佛二卷。号(ト)アトリ。廿二日飛ち。井雅庸源氏御宿三箇の大車。お代を交わり。内
年九月七日。今日私稿大物助清宗秀相父秀實死。お徳を終の由禮とて。奉事。冬送物
にて。二代実源八十卷。是を献。内十卷。至。同年十月一日。金龜院より十七史合六十冊
以文庫納む。又延喜式群書。治要。内傳。逐。貢。御。典。文。卷。内。古。内。古。内。古。内。古。内。古。
出。傳。御。殿。府。出。卷。内。古。三。日。二。象。城。小。入。清。是。大。修。繕。版。小。徳。て。向。其。日。日本。の。記。錄。等。

（略）作成する。一ヶ寺より能吏十人、南禪ちく彦紙（きのう）金地院板倉候が候ち連名ふ山（やま）内廿七日又ハ僧徒八十人南禪ちく金地院小於て法事の記録一本二部、
也掌せらるゝ。一部ハ林中一部ハ後山山頂一也（も）くさむ（さむ）也傳共赤道義
をもて、内大（だい）自（じ）也。今度は去地（ごち）身（み）者（もの）大志（おほし）の外（ほか）人（ひと）数（すう）少（すくな）ひ（へり）生（な）れ（ゆ）き（ゆ）と。九月
板倉候（はんざわ）も五次（ごじ）山（さん）之（の）物（もの）量（りょう）も大志（おほし）の外（ほか）人（ひと）数（すう）少（すくな）ひ（へり）生（な）れ（ゆ）き（ゆ）と。
枝葉集（しおぎ）本（もと）國（くに）ちよ太子（だいし）侍（し）居（ゐ）る。同年十月（ひがつ）廿日（じかど）南（みなみ）禪（ぜん）ちく金（きん）地（じ）院（いん）山（さん）地（ぢ）板（いた）倉（くら）候（ごう）
象（ぞう）と宣（せう）せし金（きん）地（じ）院（いん）板（いた）倉（くら）候（ごう）連署（れんしょ）を。同年二月（ひがつ）庚辰（こうしん）日（ひ）に汝（なまこ）安（やす）氣（き）紀（き）を傳（つた）る
内（うち）日（ひ）行（ゆき）村（むら）市（いち）山（さん）坂（さか）倉（くら）の猿（さる）と勘（かん）定（てい）也（や）四（よ）月（つき）中（なか）井（い）大（だい）和（わ）ちく（作（つく）り）大（だい）坂（さか）を名（な）みの猿（さる）
を傳（つた）る。井（い）大（だい）和（わ）ちく（作（つく）り）大（だい）坂（さか）を名（な）みの猿（さる）
七（しち）冊（さつ）上（じょう）印（いん）（本（もと）大（だい）原（はら）の末（すゑ）焼（やけ）舞（まい）の者（もの）也（や））
内（うち）廿（にじ）九（くじゅう）日（ひ）南（みなみ）光（こう）坊（ぼう）侍（し）長（なが）者（もの）也（や）
今（いま）多（た）くの泥（づ）る（ど）少（すくな）い（い）少（すくな）い（い）
今（いま）多（た）くの泥（づ）る（ど）少（すくな）い（い）少（すくな）い（い）
（略）南（みなみ）光（こう）坊（ぼう）侍（し）長（なが）者（もの）也（や）
（略）南（みなみ）光（こう）坊（ぼう）侍（し）長（なが）者（もの）也（や）

山雨の本山を写みて有る門十日 仙洞より數聚と代格六卷を武より一案院まで集め
記十六卷數聚玉史二卷古語檢送名法華集神皇系源南光坊院役とて持來候
お及て不善 洋前小於て是と漢む門十月 右ノ廢以登嘗山對教門十五日二案山華學
門十七日佐吉の山陣當小源常門日南光坊を次坐 仙洞より令集祥未三門廿九
勅使廣橋大納言爲捕之案太納言實條佐吉小東り山慶房の勅使宣門年十一月十四日
四尋小依て南源信滿の美陸を執上へ是を革綱目小美陸の説わるを終て門十八日今月
より南禪ちみ山僧也はの節迫す村止む門十八日対東大坂和賀院門廿二日以松葉院
寺ト門共之首侍長老自地唯か 佛事不出門作す曰今多法事の記録も字あり徳六公象
より古今礼義式法の未達ヤスル先月お猶うの處不仕合を參とせ作らる門其四日承
乃尔 入佛門廿六日念佛院 洋前又出ル今多作付らる記録本の内旧ナ記古ナ記統文
釋若泰文集酒文記釈日本紀内裡式山槐記數聚三代格本歎くたま門何作キ本
日記小四ノ記古ナ記統日本紀ハ神院より出ル門記ハ冷泉より三代實源ハニ案太納言も文傳實源
ノ元稿大納言ナリ西支院ハ生宮勢より山槐記ハ九案後より蒙也文傳ハス案本ナリ門がホハニ二案
勢より内裡式ハ門廿八日案内門廿九日智恩院八官大覺ちゆつ跡一条院廣橋大納言案大
納云 由財西圓源七手案を據らる門當余タ向馬若金端シテの准后根五位階多发
勢多以下三作小曰是手是門かきの分保令格式を考られ後濟より作成する手の内
計作出是年右善學校を洛陽小達むと清少南詩と號する門其年舊小十九年先是先生
肯可之將相攸擇傍依乞革不果此冬遠有火候之役又懼窩仍狀小道春与後若郎共白清達
摩序於洛教生徒乃降 幕下謂郎曰道春自欲居庠序別立誰知尉曰抄書院旅館足也西
是より後十七年を経て寒水七年小起初て庠序を開んとする一舉あつまつて三年を経て其堂と上座小建
て翌年七月十七日 右善學校堂に諸り名義をして堯典を講也 あらわ小五の萬附 神君の猶文ナリ
量をねせられたる總教法有力と 有教無類の教きゆやれやが

元和 元年改元正月旨承給 墓亨門八日写残りの本を留置
洋前虫字と念せらる門年二月勒日本の記録出學卒業門八日 仙洞來奉迄二門十日貰
此院當字毛根子付教猶存え給て是者 由謹之室門十日渡廻小還門年月九日
被府より久遠而文印せらるは追歿門十九日念佛院道玉系教より吳府を又の傳へ候
付らるは其務也よりト是の事やと南極小出荷あり五雜続教門廿一日該亦勅善の書物

彼家よりまことに上流の時著物は直詮の上由法家作室からす。其ノ大幕一塊板の外は作せ
出する所無き。二条後へ小糸紙を傳へる門女二日又其一後板沙原出でて小値て清
々ち除湯ちへ物六方七人あす。其處内邊也。月毎日東福ち不二菴へ大幕一塊又其裏一冊を
傳ふ坐共是之書にて解去治要閣巻成補へむ。四年四月二日才返出。各主ちうち草
紙文粹(ニヨリ)。西延十三冊來。記源口字本の本持三枝系於す。或來。中端へ上。四月大坂奉
教の役をひき下宿て令を下して大坂再びの事。紀元四十日名護屋出登管門十八日二条城入
虎門女二日。右廟山登管官。由對新四年五月兼體山出陣管。虎門三百鷹松御守
走丸廿九日食錢の猪馬門記録と歎。四月八日。太浦所二条のれ新田門八百石四山
出清家於由内庄二条西所。若虎門七月大坂虎城門八百疋。後秀松母子自立。門脇謙翁
宮城内税義や上。四月十八日由内。四年六月十四日有巡山。本紙文粹を送り。門毎日。太浦所
あ殿。出清一多ひた雲新版太翁一塊十枚。後府。大坂。由内。虎城の處。客室解体作。白
一枚。角小糸紙を押て。徳ちに。其附きて。と是日二条由内。敷寄。食事。金地院。玄就等を

山野院事無接種頼せやうのまゝ同月三十日余門主六月八日傍廓（山野院）小大參一卷、後九月
金光明寺經文釋卷之二抄來、持來作付令當掌持而也有二卷、否の處を去る所不於く探出
御詮小傳へ従て、若小補写す。其中作付さるが一卷出來、書情のせたま葉青感至（四脚
本般文釋）延十三冊一箇自二至十にオ一卷否とく見え先記室六月九日の条に本般文釋人主於十に冊表
紙張總以下出本別二卷、是爲人持來沙井と見ゆるを移せよ。亦りとおと今字と二承因條へ上にの裏の引延の事也
不異不と在生所少て君出一也前一社上不無極りく其の
今字外二承古不令於身、（脚註）而後出外一冊れ今日ニ豫門十首南教法隆ち阿諱院送猶之にて
唯識論卷注疏中井大和ち令院を以て、御詮小傳へ阿諱院送焉の例として此
書は先師身福ち多聞院お馬する迄二月十七日澄白水中納言太比叡寺合一冊を期せん
廿二日本般文釋一部あ付卷を以て禁御小をせらる。内廿三日障第等、政宗室家テ後院の
女自筆の古今集二部を持來一て、御詮小傳へ、清吉より入小於ハモニ修業より一再熟
え上にとりて改宗より就事の歎うる。是と並後遂一却らる。内廿四日、行軍家金光明寺を
奉て本武家の由源家系の、出内連作禮らる。内廿四日東ち宝慶院果宗院を

美太郎某謹と申候。内へ御便を経て金地院是を奉候。内廿日。乃軍家二番に渡御。餘人奉樂奉事。並御花道大名出仕。同年七月。朝日公。美濃太守。三條城下登嘗會。御内へ同女三百侍長毛清秀の手奉。清秀小摺く依る。是り。乃軍人主坐。此の事作まる。内八日。太津町萬葉小出清秀。源氏物語粉本。源氏死後。成假名。と付す。始ら因賀三條苑。ち井冷泉父子。鳥丸。内七日。武家法度。十三条。と頒布せら。寺方一弟。小文武弓馬。さだき。「承認」。と載らる。内八日。今日冷泉が為満条。上久。仍く源氏。あ源東への事。と同志。あ。内。源家自重の事。入正村の。也。松小揚。名外の。和注釈の上。却て是と銷す。と。内十七日。林中兵公。象徳法度。十七条。内。天子。法度。種の。身。一法。学。同。也。不。掌。則。不。行。古。道。而。社。致。太平。者。未。有。也。貞。政。要。治。文。史。寔。平。遺。試。は。雖。石。鬼。經。史。可。誦。考。釋。出。治。要。三。和。ち。自。光。孝。天。皇。未。經。種。為。綺。流。我。空。香。俗。也。不。可。棄。並。三。所。載。林。か。松。小。揚。考。掌。も。要。子。内。内。女。育。中。院。小。源。氏。物。語。初。吉。の。卷。を。渡。一。日。内。九。日。出。殺。考。底。小。放。く。中。院。を。て。源。氏。物。語。幕。本。の。卷。を。渡。一。日。往。内。侍。長。毛。冷。泉。酒。作。も。漢。子。を。隔。て。女。中。荒。日。く。室。の。今。大。坂。房。人の。内。小。源。氏。と。漢。の。事。又。難。琴。と。鼓。も。三。内。年。八。月。二。日。由。殺。考。底。小。於。く。中。院。を。て。源。氏。物。語。幕。本。の。卷。を。漢。一。か。字。義。山。傳。秋。あ。」（林中兵公。象徳法度。内。天子。法度。種。の。事。に。去。年。八。月。二。日。大。お。出。二。条。の。出。手。が。主。照。日。）清秀小予。も。侍。り。一。時。是。而。の。小。篇。を。讀。あ。と。決。け。ま。だ。讀。き。印。記。さ。侍。り。一。小。社。福。寺。方。能。致。を。す。と。處。を。自。己。も。主。と。學。り。と。序。編。あ。一。と。序。け。る。小。予。も。か。の。銷。あ。う。故。す。と。内。十。日。傍。松。善。小。大。義。一。後。篇。讀。十七。日。傍。不。讀。に。大。義。一。後。を。揭。内。年。八。月。二。日。二。条。山。數。途。假。府。小。還。清。秀。内。其。首。假。府。内。年。九。月。十。日。江。戶。西。九。入。清。内。月。廿。日。四。事。記。古。東。記。律。令。続。日。本。紀。続。日。本。後。紀。文。德。實。錄。乃。軍。家。乃。軍。家。而。字。主。事。而。從。記。錄。古。東。記。律。令。続。日。本。紀。續。日。本。後。紀。文。中。喬。禁。裡。に。否。之。生。板。食。修。鑿。ま。る。中。喬。内。年。十。月。廿。日。江。戶。出。五。日。内。十。月。假。府。入。清。

よ汝翁病の不豫子村右衛門は、嘉慶十四年九月群書治要板行修整する同年十月
右廻後廢入帝門二日中夜宿の病間不群書治要校合人の多く傍と留す。是より
修整する。光緒二月七日の夜中に云群書治要板行の義理に付小刻を加へて
其ノ紙版亦の少修改より後改定校合人ハスレ傍て改めて左所出づ。同七日板行修整
きより群書治要板行形手稿本切せせん。其紙を校合せ、原稿本手書き左門廿九
世翁意のままにして群書治要板行始る。群書治要板行の間述語をテ索を定む。本
上卷分松平右馬の修板余内稿心稿を修うち總裁さう。同月群書治要板行小稿を網
字表小稿を九小納アリ。先出一二の丸を右添を同廿八日群書治要板行の清字明
人林五友として補送せしむ。廿九日右添を左添。右廻公由又出奇
を添せらる。同年二月十日左添に左添。保令兼群書治要の異本を搜尋せらる。廿九
日使下向同月群書治要板行の時見合之為一本新字より清字を繰歟ち室卷等の
修整令せらる。廿九日左政大臣門本四月十七日後廢城小薨。廿九年七夕廿九日亥の刻
同玉宇渡歿。終之山神葬。墓山大棺石と称する。廿九日左廻公由落葬礼

榜子も小室で法輪寺 安心院殿蓮社崇奉通和大居士不遜一 勝利 田佐牌 大樹ち小
山安室也久林山ノ神社と成西葬送の少法出由事莫桂子以今當奉事傳也是と改め主と引て此事
令院院日実の少事も例本せを至加 上者ゆて金院南光坊が多上世分 御前(第)努力に付作業
魏の出發少城山と西御玉ハ名稱山へ地坐葬祀ハ於諸山中少位牌共之列大樹ち小立重あり也一周忌も立山後
因光山小小堂を達立御持ては休八列の移寺小亦せらるきとみれ意法修育南淨ち令院院本も小堂建立仕
勵修施承教不可代其無武家の道く事清い少孤下落者付修御之○正源日記二日を自小未だりもひき
中庭はがきの様の少令云社作坐也人間坐は事御座と奉事ゆゆけ日 大西正源崇房未れに第御事御中
七日より雨落而上方不帯火を惜もれ此公意角山太奉におなづ 井之株も寺裏塔柱柱下付作法不
拘た若一貴件不為少推事本同於日摺ト字思肩 由也而極へ少見不的廟山門甚出社少て少林外大樹らも
出候物とすん少家事くゆく不え熟參山の梵舞記十日おひの慶也詔行及多御修少殿別久移之遷度微少
起立新作坐之○少時自己十首南光坊極老も依然少中和別系坐少假處社近以少供送嘗出雲信少も表參坐事
學參りゆて志遂て出来元和年深久林山ノ金納山送云御神少主也家由代津志家也少戸端少主深參上
人あり又寺血跡少御身也天全年天台宗の佛法西極少光坊傍山天海と西崇教みまれ主と称たと也傳授少根
坐也 大根況小堂第久經少山高立拂示内院を為少主仕官尊事らる久経少上主より主之の寺少少代名傳
とも少寺より少主少主之今又少實少社傳乎て天海より天台宗の學傳也一山の開基少主少主之傳也と考一天
台少社傳方と半葉山大根況と少上參少接する少林社考少久林山ハ勝山の東矣法師とて古事記少主少主之傳也
第一萬字ハ十二所特相少少少被山綠敷少背久林山といふ少樹中少者全の子少就高傳を少
可圖少第少補陀洛山少主少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也
右少社傳方と半葉山大根況と少上參少接する少林社考少久林山ハ勝山の東矣法師とて古事記少主少主之傳也
とりふと死少古事記少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也
東夷大根況社傳少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也
為少有法教の内少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也少少主少主之傳也
稀少後役少の勤仕之狀少主少主之傳也 ○梵記十八句高山山移少如化形を事考究本多上野少

本井大社改安後常力族謝隼人松平右馬内猿弘元但馬以上七人者解酒事利室夜未嘗宿之
十九日辰酉作壁次三万坪方小室井垣手取雙刃刀斧二ツ立委別遷走り左須幕前引り越す
綱布二十三席簾子縫布十幅久袖布社奉神社西序弓序矢桶絆此役六種參神西教奉
序境序幕序幣梯系内記持て給予序轍供奉鳥帽子上序弓序矢桶絆同太極

法也序幣ハ梯系内記持て給へ予被てせ開く儀式灯明以下由志一還坐あり次内陣坐
の時悉拂地中村次建を内陣納之敷米慈忍モ麻を核之序後子予奉納也次内陣供
三振後菜六振也後菜三十六味あり皆精をより次礼之戰絆を參御神供也内記入作法
中村也次之釋加持次之釋中麻百二十石酒之次祝戸碑文謹白元和二年卯月十
九日亥时撰天吉日良辰乎太政大臣從一位源朝臣家康公乃御形像半駿州有渡
郡久能ノ奉葬高嶺仁備神供後菜此狀乎安久鎮坐至天下靜謐弥譽昌
長久之基乎守利益与恐美毛奉申辭別仁申佐久自然參集中仁不心不
淨乃者在止毛序廣成序心惠於以天守護幸給倍止恐美毛申次少拜次
拝多次退下次序幣支番再拜梯系内記化法主事中教次奉寄充各一拜奉寄

本多上総土井大歟安房常力族謝隼人松平右馬内猿弘元但馬於内陣在く早
て移し室中入也次各退下室夜脇府守入帰也御跡日記小吏刻内席小治お酒御と云ひ祝御
右の出林不輕以之社頭内席度モ亦由遠官也著度手書了記や尔坐奉て至着社系沙紙先手名へ久絆の山下
小室故空行並人之出入内法多あり○燒算記共云做神供次小足利源氏久保田社内東房尾列掌ね及常漢故か
一立社大門神送手本墨木魚本在シ次津波為次巫女奉次神供不次舞度次内着手タラ次神供難次樓門次材木の
御次社人少佐二十石の粉○元和年深出代之淨去字祭出久保田少佐手も内位牌と號之御笑度御達之あり
安富院後大河少佐傳其社也宗義乃根大居士○梯系内記内記寫之元和二年卯月某極至日光山之假時祭後
奉祀の多と因爲御是年久能山山本社洋後本社堂西供所樓門手居未以達門ニ草二月廿一日
勅之東照大社現の神号と稱らせて卯月二日正一位と稱らる四十六日以還命に寄久能
山より不勝御日光山一小改葬改革是改神是
正純土井大社改利務松平右馬内猿弘元但馬小室井垣手取雙刃刀斧二ツ立委別遷走り左須幕前引り越す
人經修奉と云。光磨々同光山記小口月八日以迄日不以廢壇小出室坐也○御跡日記卯月十二日
日光山御旅月口日月十六日夜本社遷奉後後方舟漂空令候御船
本井大社改安後常力族謝隼人松平右馬内猿弘元但馬以上七人者解酒事利室夜未嘗宿之
十九日辰酉作壁次三万坪方小室井垣手取雙刃刀斧二ツ立委別遷走り左須幕前引り越す
綱布二十三席簾子縫布十幅久袖布社奉神神主二門拂正一位九月宴會等御